

Winarart

No. 55
Mar. 2010
1800yen

「Winarart」 The Magazine for Wine Lovers

プロ20人が選ぶ
**2009年総決算
ベストワイン20本発表**

現地取材
**ポルトガルを楽しむ!
ワインと街歩き**

ワインガイド

現地取材15ドメーヌ
ニュイ・サン・ジョルジュの
ブルミエ・クリュほか93本

ジュブレ・シャンベルタン&
シャンポール・ミュジニーの
村名ワイン50本

ブルゴーニュ
2007年ヴィンテージ
グラン・クリュ&
ブルミエ・クリュ58本

ほか34本

合計235本

2007
特集
グラン・クリュ
昇格を目指す

ブルゴーニュ

シャトー・ル・ピュイ

【コート・ド・フラン】

ボルドーをピオから適ざけた原因はふたつの世界大戦と60年代以降の農業の普及。その中で1930年代



から「微生物を増やすことによる土壌改良」に着眼し、ピオを賣くことは「時代に逆行している」と異端児扱いされたとい

う。バイオロジーとピオディナミの関係については、「近年はピオディナミの『月との連動』『土壌に生命力を与える』という基本的な考えが、バイオロジーにも共通認識として広がっており、特殊なものとしてピオディナミが孤立しているわけではない」とする。

ひとつの環境として見直しやすい条件をもっている。

ピオへの取り組みは、右岸やマイナー産地から

多くの左岸の格付けシャトーは畑の規模がボルドーの中でも大きく、経営においても組織化された企業体質が強い。所有者、総支配人、技術責任者……など、役割が細分化し、経済との関連性も独自のものだ。左岸の格付けシャトーはフランスの中でも、所有者と現場の距離がもっとも近い所だ。また名声を確立しているシャトーにとっては、ピオをコマースとして使う必然性も低く、広大な畑で全面的にピオを実践することは、メリットよりもさまざまな意味でリスクが高かった。ボルドーにピオのイメージが少ない理由もここにある。

そんななか、ボルドーをピオに導いた流れはふたつある。ひとつはビジネス的観点。コート・ド・



Chateau le Puy